

NPO 法人

全日本語りネットワーク

ニュース

〒185-0021 東京都国分寺市南町 2-18-3 国分寺マンション B-03A

(Fax) 0237-67-7001 (振替) 00130 - 2 - 114808

(E-mail) welcome@japankatarinet.jp

(HP) http://japankatarinet.jp/

2021. 1. 24 発行

去る年来る年・語り雑感



西村敦子 (NPO 法人全日本語りネットワーク 監事 東京都世田谷区)

年が明けました。令和3年、どんな年になるのでしょうか。新型コロナウイルスは収束するのでしょうか。東京オリンピック・パラリンピックは開催されるのでしょうか。それより何より、今年こそはと心待ちにしていた「全日本語りの祭り」開催が来年に持ち越されたことと決まったようで、残念でなりません。

with コロナの日々だった昨年、3密ということばを後生大事に、子どもたちにも大人にも、目を見て語り、聴いてもらう機会は失われました。それでも語りネットワークの理事の方々は、Zoom という新しい伝達手段を使って、11月22日「テラレーション平和の語り 2020」を開催しました。それに先立って、紙上おはなし会を企画し、語り手の方々の心にしみるお話たちを郵送してくれました。とても嬉しいことでした。(オンラインで聴く・見るということについていけなくて私は不参加でしたが、いつも新しいことに積極的な友人は、音声、音質の問題は今後に譲るとして、語る人の顔がしっかり見え、Zoom という手段でおはなしを聴くよさは十分感じられた、と言っていました。)

私が伊豆高原で開いている文庫は、感染者数急増の東京から出かけていくことが憚られ、4、5、6月と休館にし、遠方から来てくださる語り手たちに依る7月恒例の「伊豆高原・海の日のおはなし会」は中止となりました。ただ、文庫の仲間で作っているおはなし勉強会中心の5月「若葉のころのおはなし会」は9月に「初秋に寄せて」と名を変え、聴き手は少人数でしたが子ども向けにもおとな向けにも実現でき、喜んでもらえてホッとしました(もちろん、フェイスシールドやシールドマスクを使って)。

さて、本は元より新聞掲載の詩(俳句、短歌、記事も)を声に出して読む習慣のある私ですが、昨年は私にとって、語る根っこに声(美声悪声の問題ではありません)があることを常より感じた年でした。2月の末、「全日本語りの祭り in 那須」で、私のつたない語りを聴いた城陽おはなしサークル(京都府)の方々がネットワークを通して私に語りをと招いてくださったのが発端です。時間があってもいつも練習不足の私は、前日京都に着いて宿近くの東寺に出かけました。普段ならたくさんの観光バスが連なるであろう駐車場は空っぽ(大阪のライブハウスで初めてクラスターが発生した頃)。梅の花が満開でした。私は、誰もいない五重の塔の前に陣取って、明日語るプログラムのお話を順に語り始めました。大きな白い雲がいくつも速いスピードで塔の上を通り過ぎます。すると、まるで五重の塔が私の方に傾斜してせまってくるような感覚を覚えました。それが私のおはなしに息を吹きかけてくれたのです。冷たい風が梅の香を運んできました。体の中からおはなしがゆっくりと立ちあがり、やがてしっかりとした声を伴って塔という聴き手に届けられたような愉悦感でいっぱいになりました。(翌日おはなし会でいい語りができたかは?ですが)

そのとき私は、どうしてお話を語りたと思ったのかを思い出したのです。子どもの頃、ラジオから聞こえてくる<人の声>が物語る不思議の世界に魅入られたのです。40代後半、四国八十八ヶ所をひとりて歩きました。寺から寺への途中、山中で夜になり怖い思いが限界に達しそうになった時、下の方から「西村さんですか〜」という女の人の澄んだ声が聴こえました。泊まる宿の尼寺の方でした。そして駆け下りた小さな庵の前に咲いていた紫陽花の色、「待っていましたよ」という声、人。そこだけがぼーっと映し出されて、幽玄の世界にいるのかと思いました。現実に戻ったあとも自分の中に残った不思議という感覚……。そう、今もこれからも、物語の中に<人の声>がつむぐ感覚・宇宙観を見つめたくて、目の前の聴き手と共有したくて、語っていけたらなと思うのです。

児童図書館研究会東京支部ニュース紙に17年書かせていただいた子どもの本の感想文をまとめた冊子を出しました。読んでみようと思っただきの方は7ページをご参照ください。